

楷書敬齋箴

綱

本

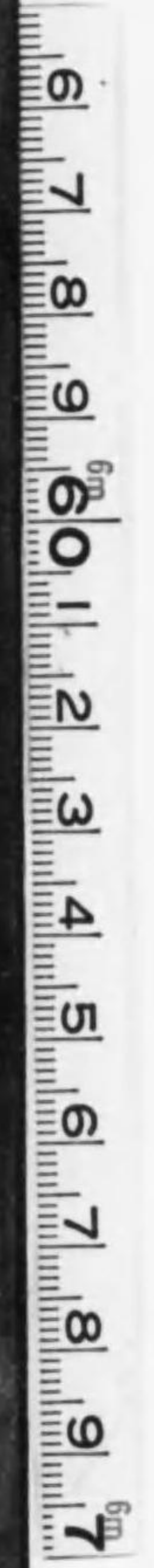


特257

728

71

72



始



特257
728



楷書敬齋箴

中村春堂書

東京日本書道學院藏版



正

其

衣

冠

尊

其

瞻

視

潛

心

以

居

對

越

上

帝

足

容

必
重
手

容
必
恭

擇
地
而

蹈
折
旋

蟻

封

出

門

如

賓

承

事

如

祭

戰

戰

競

競

罔

敢

或

易

守

口

如

瓶

防

意

如

城

洞

洞

屬

屬

毋

敢

或

輕

不

東

以

西

不

南

以

北

當

事

而

存

靡

他

其

適

勿

貳

以

二

勿

參

以

三

惟

精

惟

一

萬

變

是

鑒

從

事

於

斯

是

曰

持
敬
動

靜
弗
違

表
裏
交

正
須
臾

有
間
私

欲
萬
端

不
火
而

熱
不
冰

而寒毫

釐有差

天壤易

處三綱

既

淪

九

法

亦

斲

於

乎

小

子

念

哉

敬

裁

墨

卿

可

戒

敢

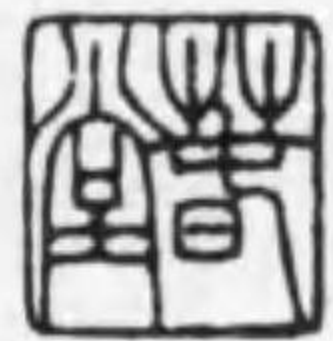
告

靈

臺

宋朱文公敬齋箴

春堂書



訓讀

宋の朱文公

敬齋の箴

其の衣冠を正し、其の瞻視を尊ぶ。潛心以居、對越上帝。手容必恭、折旋蟻封。足容必重、擇地而蹈。戰戰兢兢、罔敢或易。出門如賓、承事如祭。母敢或輕、防意如城。守口如瓶、不南以北。當事而存、萬變是鑒。不東以西、不南以北。惟精惟一、表裏交正。勿貳以二、是日持敬。不火而熱、不冰而寒。從事於斯、私欲萬端。九法亦敦、毫釐有差。須臾有間、天壤易處。於乎小子、念哉敬哉。墨卿可戒、敢告靈臺。

宋朱文公敬齋箴

正其衣冠	尊其瞻視	潛心以居	對越上帝
足容必重	手容必恭	擇地而蹈	折旋蟻封
出門如賓	承事如祭	戰戰兢兢	罔敢或易
守口如瓶	防意如城	洞洞屬屬	母敢或輕
不東以西	不南以北	當事而存	靡他其適
勿貳以二	勿參以三	惟精惟一	萬變是鑒
從事於斯	是日持敬	動靜弗違	表裏交正
須臾有間	私欲萬端	不火而熱	不冰而寒
毫釐有差	天壤易處	三綱既淪	九法亦敦
於乎小子	念哉敬哉	墨卿可戒	敢告靈臺

371
502

摘解

◎朱文公この箴言の作者朱文公は、宋史、道學傳に「朱熹字は元晦、一の字を仲晦、諱して文といふ。其の學大方理を窮めて其の知を致し、躬に反して其の實を踐み、易して居敬を以て主となす。嘗ていふ聖賢道統の傳散じて方冊にあり。聖賢の旨明かならず、而して道始めて晦しと、是に於て其の精力を竭し、以て聖賢の經訓を研窮す。黄幹曰く、孔子よりして後、曾子、子思其の微を傳き、孟子にして始めて著る。孟子よりして後、周程張子其の微を傳き、熹に至り始めて著ると、熹者以て知言となす」とあり。著す所諸經傳解、四書集註、通鑑綱目、小學楚辭註、等あり。慶元六年（我が皇紀一八六〇年）に卒す。年七十一。徽宗公に追封せられ、孔子の廟庭に從祀せらる。◎敬齋自ら飲食動作を謹しめ、清潔謹直を守ること。◎箴封いふ字。◎上帝全智全能の神。◎蟻封いふ字。◎折旋施はめぐる。即ち折れ返つて避けて通る。◎戰々兢兢恐れつゝしむ。◎洞々屬々深愛の中に恭敬の意を含めるをいふ。◎須臾少しの間。◎毫釐少しばかりの意。天壤は土、即ち天と地。◎三綱君は臣の綱、父は子の綱、夫は妻の綱。◎九法天下を治むる九類の法。◎小子門人をさす。又自己の謙稱にも用ふ。◎墨弊墨の異名。◎靈臺靈魂の用ある所。

通解

【題】宋の朱文公が、自分の行ひを慎しみ警しめんとして作つた言葉。
【文】其の着くる所の衣冠、即ち身つくろひを整へ、其の眺め見る所を奪び、心を靜慮に落付きを保つてゐるやうにし、いつも上帝に對越してゐるやうな態度であらねばならぬ。足の運び方、手の動かし方、何れにも慎重に氣を配り、歩くにも地を擇んで踏み、若し道に蟻塚でもある時はこれを避けて通るやうにする。又外出する時には賓客の心持を以て我家を出掛ける、何事か承くれば宛かも祭事にでも従ふやうに丁寧な態度で行ひ、決して粗略にしてはならぬ。口は禍の門といはれてゐるやうに慎しむべきは言葉である。故に瓶の如く口をすばめて無駄を語らず、又こゝろばせも種々の邪念の起らぬやうに、城の如く嚴重な用心が必要である。そして飾り氣なく素直に専一恭敬な心持にて、決して軽々しい振舞をしてはいけぬ。東に行かずして西に行き、南に行かずして北に行き、物事に手を下すに當つては一心にそればかりに心を注ぎ、他の事に氣を引かれるやうな事は無い。貳を以て二とし、參を以て三としてはならない。世間の事柄は複雑なものであるから、なか／＼そんな數學的通りにゆくものではない。只心を専一にして、物事に對し臨機應變の處置の取れるやうに、平素心掛けて置かねばならぬ。斯様にして事に當る。是れを敬を保持するといふものである。立居振舞は禮儀に違はず、表の正しい事は申すまでもないが、裏と雖も表の正しいのとは變りはない。暫時でも間暇があると私慾の念が千々に起きて來るものである。又心の持方によつて火を焚かぬのに熱く、米らぬのに寒いとも感じられる。又僅かの差でも、其の末となると大差を生じて、天が地となり、地が天となるやうな易りが出來て來る。人間の守るべき三つの體に秩序がなくなり、天下を治める九類の大法が破れたならば、萬事は休してしまふのである。あゝ小子よ、よく思ひめぐらして顧みなさい。又敬しめといふ事も心得て置かなければならない。敬齋の箴を作つて敢て魂のある所に告ぐ事とする。

昭和十二年十月二十五日印刷
昭和十二年十一月一日發行
楮書敬齋箴
(定價五十錢)

著者 中村春堂
發行者 柴山格太郎
東京市豊島區富士見町三ノ三
印刷者 小森章
東京市小石川區藤町二四

發行所 東京市豊島區富士見町三ノ三
日本書道學院
東京市小石川區藤町二四

終

